
僕たちのエロ本

やや夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕たちのエロ本

【著者名】

やや夏

N6493M

【あらすじ】

父と息子の成長を描いた作品です。

小学校の校内で放課後のチャイムが鳴り響く。

余韻と他の生徒をよけながら長い一本の廊下を歩く。ぽんやりする頭で僕は昔を見ていた。

お母さんは僕が小学校一年生のときには「くなつて、僕はお父さんと2人で生きてきた。お父さんは飲めないお酒を毎晩飲むようになった。それから四年も経つて僕は小学校六年生になった。お父さんの髪には白髪が増えた。

お父さんが、お母さんが、僕が歪んでいく。笑顔もどこかへ飲み込まれそうになる。

「おい、修介つてば！」 不意に肩を叩かれて、僕の中に現実が戻つてくる。

「修介、今日西川公園に集合な」

「あ、分かった。今日はグローブ持つて行くから」「おつけー。じやあまた後でな」

たつまは僕の横を通り過ぎて下校の道が同じ友達のところへ行つた。僕は一緒に方向に帰る仲良しの友達がいないためにいつも一人で帰る。たつまが少し羨ましい。

女子の集団の中に紛れる僕が好きな子、さつきちゃんを横田でチラリと見ながら階段を降りる。

さつきちゃんとは五年生の時にクラスが同じになつて、隣が席になつた。

さつきちゃんは僕が教科書を忘れると一緒に見よつと語つてくれた。その時に風でさつきちゃんの髪が揺れて優しい香りが漂つた。それが忘れられずにさつきちゃんを目で追ううちに、僕はさつきち

やんの優しさをたくさん知つて、いつの間にか好きになつていった。

上履きからスニーカーに履き替えて外に出ると少しだけオレンジ色に染まつた景色が広がつていた。

綺麗だと思うよりも、どう暇を潰して帰るつかと考えていた。でも最後には石を蹴りながら帰る方法しか思いつかない自分にため息をつきながら蹴りやすそうな石を見つけて蹴る。

石が歪んでいく。周りの風景が溶けてお父さんとお母さんを作る。僕は思い出していた。家族みんなで手を繋ぎながら石を蹴つて帰つた日の事を。

「あつ！」

何かに当たつて石がどこかへいつてしまつた。「雑誌？」いつもと変わらない道に思わぬお密さん。

エロ本だつた。

一度友達が学校に持つて来て僕は人ごみの後ろから覗いた事ならあるけれど、目の前にあつたことはなかつた。

心臓が大きくなる。

周りに誰もいない事を確かめてから、泥がついたそれを一ページずつめくつた。

「すげえ……。」

思わずもれた言葉には熱がこもつて湿っぽかつた。体全体がどくんと脈打つ。

国語の授業中に教科書を一人で読む時や先生に怒られて立たされた時、音楽発表会でステージに上がる時よりも一番ドキドキしている。

もう一ページとめくつてしまつ。手が止まらない。

「修介くん何してるの？」

思わず体が跳ね上がる。

すぐに分かった。ちょっとかすれたこの声はさつきちゃんだ。
一気に熱が覚めて冷たくなる。

振り向けない。

「ねえ、何してるの?」「僕の肩を持つて覗いてきた。
やだ! 修介くん何これ!」

「いや、あの……違うよー。」

「最低。こんなに見てるなんて気持ち悪い」「
さつきちゃんは僕を睨むと、走って行ってしまった。
涙が簡単に頬を流れしていく。

嫌われただろうとこいつことばかりが頭の中を巡って、家に帰つても僕の目からは涙が止まらなかつた。

* * * * *

昨日は体調が悪くなつたと友達に電話で嘘をついた。僕は六年生になつてから可愛くない嘘を覚えた。

「お父さん、学校休みたい」

「ん? 熱もあるのか?」

さつきちゃんに会いたくなくて学校を休もつと嘘を考えたけど、僕はまだお父さんにうまい嘘をつく自信がない。

「やっぱ何でもない」

「まあ、体調が悪かつたら保健室に行きなさい」「分かつた。行つてきます」「

玄関の扉がいつもより重かつた。

体も重い。いつもの通学路が妙に長く感じる。本当に体が重くて鉛が付いてるのかと後ろを見たけれど何もなかつた。

でもその代わりにさつきちゃんがいた。

また心臓がうなる。

どうすればいいのか分からなくて目を合わせずに周りを見ていると、さつきちゃんの言葉が僕を包んだ。

「昨日帰つてからお父さんに聞いたの。そしたら、その……昨日みたいな事は男の子なら普通だつて言つた」

さつまちやんは僕の手を取つた。

「だから誰にも言わないよ。昨日はあんな事言つて」めんね
「顔が熱くなるのをはつきりと感じる。

僕はさつまちやんの柔らかい手を汗で濡らしてしまわないように、必死で平常心を取り戻そうとしていた。

「あ……ありがとう」

確かに今僕はH口本を見た時よりもドキドキしている。

* * * * *

家に帰つて玄関を見ると、白いH口ールがあつた。

「ただいま」

「お帰り」

お父さんの隣には知らない女性。

きつくない優しいメイクとすらりとした柔らかい体に白地に小花柄のワンピースがよく似合つていた。

「お父さん、お密さん？」

「いや、お密さんじやなくて……お父さんの再婚相手なんだ」

「再婚相手？」

僕の頭の中にお母さんの顔が浮かんできた。次にお父さんと僕。手を繋いで笑つてゐる。あの頃の僕たちはもう歪まなかつた。

お父さんの体からはお酒の匂いが消えて、白髪を染めて若くなつていた。

僕たちはお母さんをずっと心に置いてこれから歩き始めるだらう。

そして僕は新しいお母さんをきっと好きになれる。

僕の好きなあのトトお姉さん似ているから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6493m/>

僕たちのエロ本

2011年6月3日23時58分発行